

□ 特 集 □

» シンポジウム «

集 団 精 神 療 法

司 会：加藤 正明（国立精神衛生研究所）

副司会：逸見 武光（法務総合研究所）

畑下 一男（関東労災病院）

□ は じ め に □

わが国の精神医学関係の学会で、集団精神療法それ自体がシンポジウムとしてとりあげられたのはこれが初めてであろう。副司会者の逸見さんと相談の上、3回の打合せ会を開いて演者、討論者と話し合ったことも異例なことであった。司会を指名されたときからすでにほぼ内定していた WHO 会議のため、司会ができなくなり、逸見さんに大変ご面倒をかけたが、打合せ会の集団討議で畑下さんに応援願うことになった。

ことに「わが国における集団精神療法のあり方」が最初的话题になり、精神療法における立場がまず問題にならざるをえなかった。周知のようにニューヨークでは、モレノを中心とする心理劇およびサイコメトリーの学会と、スラブソンを中心とする精神分析的、活動的集団精神療法の学会とは、長年にわたって激しい対立を続けており、国際集団精神療法学会では両派の対立が個人攻撃にまで広がったという歴史がある。わが国では幸か不幸か、この2派のいずれか一方につよい傾斜を示すものはすくない。集団精神療法に対する個人精神療法家の批判は聞くが、それは集団精神療法の間の対立ではない。打合せ会で私なりに感じたことは、やはり集団力動に対する見解のちがいであり、この点、鈴木氏、中久喜氏その

他の精神分析的集団力動のとらえ方と、藤田氏の森田理論および社会学的なとらえ方の組合せとのちがいが目立つたように感じられた。また、鈴木氏の入院精神分裂病患者、藤田氏の外来神経質患者、中久喜氏のコミュニティ・ミーティング、畑下氏の外来一般神経症患者、逸見氏の収容・犯罪精神障害者など、対象となる患者の状況、診断区分などのちがいもあった。

「なにが集団精神療法か」という問いは、スラブソンの同名の論文にもあるように、集団精神療法の根本的かつつねに新しい問題点であり、すべてここから論じないと議論が空転する。——このことは先年池田由子氏がグループワークとの差について強調した。

また、外国でも個人精神療法を継続した2~3人の患者を中核として集団精神療法を行なうのがカナダ人に適しているとするものがあり、スイスのグッゲンビュールも同国人がアメリカ人ほど良いミクサーではないとしている。このことはわが国にもあてはまることであろう。

一般社会における人間関係の特性が、集団精神療法のあり方や目標に大きな関連をもつことも当然のことであり、この分析のうえに集団精神療法における特異性と普遍性が考えられねばなるまい。

司会者として、集団精神療法に関する集団討議を、みごとに展開された逸見氏、畑下氏、そして演者の鈴木氏と藤田氏、討論の中久喜氏に感謝したい。

(加藤 正明)

* 第4回日本精神病理・精神療法学会第2日シンポジウム（1967年10月17日・東京・都市センターホールにて）